

さくらやま便り

No.373 号 2025 年（令和 7 年）10 月 15 日



白内障の贈り物（1）

エッセイ

板東 洋三郎

「この手術は、濁った水晶体を取り除いて、人工の眼内レンズと入れ替えるのですが、それが、時間の経過に伴う身体の変化には対応できないため、術後の見え方は人によって違うんですね」

大きなレンズで、私の目を検査しながら医師が言った。白内障で両眼の手術をし、一年が過ぎたので、受診した日に、術後の見え方の変化について私が話したことへの説明だった。

白内障で両目の手術をして一月ほど経っていた。その日の夜、仕事から帰り、ごみを出しに置き場のある広い駐車場に行くと、その向こうの鬱蒼としたくぬぎの森から現れつつあった月が見えた。中秋の満月であった。

ところが術後初めて見る満月に、私は、文字通り目を疑った。なんと円いはずの満月が楕円形なのである。星はと言うと、あたかも秋の田んぼに飛び交う赤とんぼのように見える。

確かに私は乱視なのでそれを矯正する眼鏡を使っている。家に帰り、眼鏡をかけて再度見に行ったが満月は楕円形のまま、星もとんぼのままであった。

ところが、無意識にふと目を細めると、なんと満月がほぼ真円に見えたのだ。それと同時に、満月の左上辺りがある、あの星がくつきりと見えた。北斗七星である。私が名前を知っている数少ない星であり、どこにいても星空を見る時には、無意識のうちに最初に探す星である。

北海道東部の戦後開拓地で育った。小中学校のある最寄りの小さな町からは六、七キロあり、標高五百メ

ートルの高台であった。とりわけ冬になると天気の良い日には、早い日没とほぼ同時に無数の星が夜空を埋め尽くす。

そんな時、最初に目につくのが、子供にもわかりやすい、ひしゃくの形をした北斗七星であった。いつもの位置にそれを見つけると、安心にも似た思いで眺めていたことを今も思い出す。

しかし、そんな小さな楽しみも、地元の定時制高校を終えて上京し、国分寺市で新聞配達をしながら予備校に通うようになってからは、いつの間になくなっていった。生活そのものが変わったことはもちろんだが、当時の東京には、あの北国の星空のようなそれはもちろんなかった。だが、大学受験と言う目標を掲げた日々は、それなりに充実していた。

ところが、目標であった都内の大学の夜学に入学した翌年、建設中の学生会館の運営方法をめぐって学生と大学が対立し、バリケードを築くような紛争に発展した。しかも、それは学内の紛争からあつという間に、日米安保改定反対という政治色を帯びるものに変わりしてしまった。

近隣の大学も、それぞれの学内の問題から起こった紛争に政治が絡む運動へと拡大し、神田周辺では連日デモがあった。あるサークルに属していた私も、警官隊に水を掛けられ、小突かれたりしながらもそれに参加していた。

しかし、長引く紛争で、リーダー間の争いや、スポンサー企業に引き抜かれていく彼らを目の当たりにして、単純な私の向学心は目標を見失い、三年に進んでいたが手続きもせずに、ドロップアウトしてしまった。

そんなある朝のことだった。朝刊の配達を終え、残った新聞に目を通していた時「ブラジルに青年の村を」という地域版の記事が目についた。学生運動に挫折した東京農大の若者が、ブラジルのサンパウロに移

住し、農業に携わるうちに与えられた夢を語っていた。私は、その日のうちに同じ市内に住む彼を探し出し、意気投合した。

プロジェクトの実現に必要な資金を作るために、私たちが選んだのは、廃品回収であった。回収元が貸してくれた小型トラックで、甲州街道や五日市街道沿いの住宅街を回った。更に新たに加わった仲間も参加し、仕事は順調に進んでいたのリーダーは、私に準備のために先発としてサンパウロに行ってくれないかと言った。

快諾した私は、独身の移住者には必要であった現地の呼び寄せ人を紹介してくれる、当時練馬区にあった独身移住者の訓練所に入った。訓練所の一日は、早朝のランニングで始まり、ブラジルの国語であるポルトガル語や歴史、文化の講義であった。それぞれの理由から人生の再出発を期する男女十数名の若者たちの訓練所での日々には、期待と不安が同居する独特の雰囲気があった。

半年が過ぎ、私たちが卒業する時がきた。訓練所の伝統の「卒業試験」である一か月間の無銭旅行を終え、訓練所に戻った私を待っていたのは、二週間後に横浜港から出港する最終的な許可であった。

翌日私は、北海道の両親に会うために出かけた。「何もしてあげられないけど、体に気を付けて頑張るなさい」と言ってくれた。私が父に会ったのはこれが最期となった。その夜、外に出ると北斗七星が頭上に見えた。あたかも、父親と同じことを言っているように思えた。

その年の九月二日の夕方、私を含む百二名の移住者に乗せてブラジル丸は、横浜港を離れた。東京にいた姉と訓練所の仲間たちが見送りに来てくれた。

船は静かに大棧橋を離れ、外海に向かって進んだ。少なくなった岸壁の人々も見えなくなり、私が最後に見た日本は、水平線に消えて行く富士山の頂上だった。



た。船が闇に吸い込まれるように進むに従い、満天の星空が沸きあがってきた。先週北海道で見た北斗七星もそこにあった。人影の絶えた甲板から私も船室に降りた。

(次号に続く)

よろしくおねがいします



ちよこつとニュース

主任 池原雅彦

◎新入職員紹介

10月からお世話になります、池田雄貴(いけだゆうき)と申します。

先月まで、お隣のデイサービス、ひまわりで勤務をしておりましたので、ケアハウスの皆さまの、明るく元気なお姿をよく拝見していました。人生の先輩である皆様からいろいろなことを学ばせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

◎今月の一句(短歌と川柳そして絵画です)

刀折れ 矢尽きて老軀よれよれに
引きずり歩く 老いの坂路 齊藤 勇夫

一人の優しい ほほえみも

大きな愛の ケアハウス 柳瀬 和子



絵 吉田和子



裏磐梯(うらばんだい)を散歩している時に見つけた花を描いたそうです。

生活相談員から

●行事予定

10月19日 体操教室
10月20日 入居者懇談会(午前)
11月2日 焼き芋おやつ
11月11日 歌声サロン(第二・第四火曜)

●日本介護福祉士会からのお知らせ

映画「明日の記憶」を無料配信
俳優の渡辺謙さん主演の映画が無料配信されます。若年性アルツハイマーと診断され、妻や周囲の人たちに支えられながら必死に病と闘うストーリー。ご興味のある方は同福祉会ホームページの申し込みフォームから。11月5日締め切り。配信期間は11月10日～16日まで。

ケアハウスに咲いた、夕顔

